

長野県革新懇ニュース

2015年5月号
(発行日5月10日)
年会費5000円(送料込)
振替 0510-3-15971

191

発行 日本と信州の明日をひらく県民懇話会
(長野県革新懇) 発行人: 山口光昭 編集長: 高村裕
〒380-8790 長野市県町593 高校教育会館内
TEL: 026-234-1231 FAX: 026-234-2219 メール: yamaguti@trust.ocn.ne.jp

NO! 戦争する国
生かそう! 平和憲法
6.7 長野県民大集会

13:30 ~ 1 時間、長野市ひまわり公園



1936年駒ヶ根市生まれ。1951年岩波書店入社(働きながら都立九段高校、早稲田大学文学部ロシア文学科卒業)、宣伝部長、代表取締役専務を歴任。2002年退職。日本ジャーナリスト会議会員、マスコミ九条の会、信州岩波講座(須坂・松本)、本をたのしもう会(武蔵野)等で活動中。

本を読んで

騙されない力をつけよう

今井康之 さん

(岩波書店社友、信州岩波講座実行委員会相談役)

くじ引きで岩波書店に

Q 岩波書店にはどのような経緯で入社したのですか。

A 私は1936(昭和11)年1月に駒ヶ根市で生まれました。1カ月後にあの2・26事件が起きた年です。中学1年の時、長患いしていた母が亡くなりました。子ども心にも治療費がかさんでいることを感じておりまして、父親は高校にやらせてくれとは云うまいとその時、心に決めました。3年生になった時、この学校の大先輩で、当時岩波書店の代表取締役専務で、のちに会長になる小林勇さんが、校長の

ころに、いい子がいたら一入学校推薦で寄こして欲しいといってきたというのです。前年にもそのようなことがありました。直ぐに候補は二人に絞られたようですが、甲乙がつけられなかったのです。この学校はマンモス校で、1学年が400〜500人もいました。

卒業式も間近なある日、校長室に呼ばれました。行ってみると親友の真島昇君もいました。校長は岩波からの採用の話をして、くじ引きで決めると云いました。教頭が持っているのが順番を決めるくじ。校長が本くじを持っていました。真島君が1番くじを引いたので、先に本くじを引きました。私は選びようのない残りくじ。私が当たったので1951年4月に岩波書店に入りました。

今までもここで話を終えると、くじに外れた方はどうなった!と聞かれるので、今日は話を続けます。

真島君は地元の高校にトップで合格したことです。卒業時には学校推薦で東京の大手保険会社に入りました。私はほっとしました。この労働組合は全損保の中心的な組合でした。やがて会社の分断攻撃を受け、6000人規模の労組があつという間に100人ほどになってしまいました。真島君は不当きわまりない差別や配転を受けても屈せず、奥さんと共に第1組合員として頑張り

ぬきました。私は真島君と同じ方向を向いて歩んでいることが実感できうれしかったですね。その彼も10年前に病没してしまいました。残念です。

非戦を貫いた岩波書店

Q 岩波書店はどんな出版社ですか。

A ご存知のように、岩波書店は1913(大正2)年に諏訪出身の岩波茂雄が創業しました。この店主の下に、多くは信州出身の高等小学校卒(いまの中学2年生)の丁稚と呼ばれる少年たちが働いていました。後年この中から小林勇や竹久夢二の研究でも有名な茅野出身の長田幹雄など多くの幹部が輩出されていきました。戦後もこの雇用形態が続いていて、中卒、高卒の年少社員がある年数、掃除やお茶くみ、荷造り、使い走りをしてしながら大人の仕事を覚えていきました。私もその一人でした。

岩波茂雄の東大時代の友人には漱石の門人が多く、漱石も岩波を信頼してくれたこともあって、いわゆる漱石人脈が岩波書店の主要な著者になってくれました。20年もすると岩波書店は、人文社会科学、文学芸術から自然科学全般にわたって、国内外の学術研究の第1級ものを刊行する出版社として名が知られるようになりました。これらの地道な学問研究を基礎にして、文庫や新書も含めて

の教養書、啓蒙書を旺盛に出版してきました。

岩波茂雄はこうした出版活動を通して得た確信から人目も憚ることなく日中戦争に公然と反対しました。日本が文字を持てるようになったのは中国のお蔭。この大恩人に向って矢を射るとは何事だ!と怒ったそうです。

敗戦を茂雄は天譴(天からのとがめ)と云って喜んでやうです。戦争協力の本を1冊も出さなかつたというのが、岩波書店の誇りです。しかし、アカデミズムでは戦争を防げなかつたという反省から岩波茂雄は、戦中に『君たちはどう生きるか』を書いた吉野源三郎を創刊雑誌『世界』の編集長に据えました。吉野源三郎と小林勇は戦前戦中、治安維持法違反の罪名を着せられて厳しい獄中体験をしました。岩波茂雄を支えたこれらの先人たちは、茂雄(1946年没)亡きあとの岩波書店を発展させ、今日につなげてくれております。出版活動を通して日本と世界の平和と民主主義そして学術文化の発展に貢献するというのが岩波書店の出版理念です。いい職場でした。

読む力を失うと

考える力を失う

Q 最近本や新聞の読者が少なくなっているよ

【2面に続く】

コラム

5月5日赤旗しんぶん、山内敏弘氏(一橋大学名誉教授・憲法学)が加藤周一氏の言葉を紹介して

た。：ローマ時代から「平和を望むならば戦争に備えよ」という言葉があつた。しかし「戦争に備えたならば戦争になる」。歴史がそれを示している。だから「真の平和を望むならば平和の準備をしろ」・・・筆者は、この記事に強くひかれた。◆昨秋、ASEANを知るツアーに参加した。その際、インドネシア国際戦略研究所顧問のウィルヨノ・サストロハンドヨ氏(80)と懇談をもつ機会に恵まれた。氏は、外務省政策局長や主要国の大使を歴任し、数年前まで核不拡散・核軍縮に関する国際委員会の委員を務めた、インドネシア外交の重鎮である。その氏が加藤さんとまつたか同様のことを語ったのである◆「私は、その時代は去つたと思つている。『平和がほしい』れば平和を持つてそなえよ」です。ASEANは今、時代にふさわしい平和外交をめざしている。前インドネシア外相のマルティ・ナタレガワ氏が提唱したインド太平洋友好協力条約もその延長上にあるものだ◆経済的には途上国のASEAN諸国であるが、外交では先進国。翻つて、日本外交は後進国どころか、逆進国になろうとしている。この動きを止めなければ世界の恥さらしである。

うです。

A その通りです。書籍や雑誌について云えば激減しています。新聞をとらない家庭も増えていますね。出版界でいえば、今から20年ほど前の1996年が売上げのピークでした。それ以後は下降の一途です。

2014年で見るとピーク時の40%減です。ところが、まともないうか、しっかりとした本は1970年代半ばから売上げに陰りが出始め、長期の低落傾向に歯止めがかかっておりません。

私が見るところ、ベトナム戦争が終結した1975年あたりが戦後日本社会の分岐点になっていると思います。社共闘は分断され、総評も解体し、日本は長いこと政治的無風状態になってしまいました。前半にはアメリカが対日政策を変更し、ソ連を仮想敵国とする冷戦体制をつくります。日本はその前線基地となり、そこから国民との間に様々な軋轢が生じました。60年70年安保やベトナム戦争などの問題のすべてを私たちは政治問題にし、国論を2分するような大闘争を展開してきました。このような時代は、自分の意見を持つためにも本を読んだのです。しっかりと本が大きい売れた時代でした。

後半は高度経済成長が加速化していく時代です。人口が農村から都会に流出し、名目賃金も上って「豊かな社会」が現出します。1950、60年代には、1家に1台自家用車が持てる

とは想像もできませんでした。家族全員でレストランに行く、国内旅行はもとより海外ツアーにも出かけて行く。クラス全員が高校に入り、その半分为大学にまで入るといった、夢のようなことが現実になったのです。

私は政治的無風状況と「豊かさ」やIT化が複合して本を読まない社会の基盤をつくっているのではないかと思っております。日本列島に人間が住みだして初めて飢えを知らなくなつたのは、たかだか30、40年前からのことです。物質と精神の関係は人類にとって永遠のテーマですが、それぞれの時代にはそれに照応した物質と精神の関係と構造があると思っています。ところが、ITも含めて物質の側面だけが驚くべきスピードで変わったので精神活動が対応しきれていないのだと思います。準備の少ない子どもや若い親たちが被害者になり、加害者にもなっています。いわゆる先進諸国でも同質の問題で悩んでおりますから、世界的な課題です。いま日本では新たな格差と貧困が生まれておりますが、お金がないから本が買えないという状況ではないので、問題は深刻です。いまや一出版界の責任範囲を越えて日本の重大な社会問題にしなければなりません。

本を読む力を失うと社会は考える力を失っていきます。この土壌が安倍政権みたいな理不尽なものを生み

出します。怖いことです。

本を読まない社会を憂える 信州岩波講座を

Q どんな動機で信州岩波講座を始めたのですか。

A いまお話ししたように、本を読まない社会がどんなことになるのかを憂えて創設しました。1980、90年代は出版界のバブル期で、これが出版物かと云うほど商業主義で汚染された本や雑誌が店頭に溢れていました。その頃信濃毎日新聞東京支社の中島忠生営業部長と知り合いになりました。私は岩波では宣伝部門に40年もいましたからその関係です。中島さんが提起した案を二人で

かれこれ10年程、構想し、1999年夏から須坂市でスタートさせました。主として県内の市民ボラティアが主体となって企画・運営を受け持ち、須坂市、信濃毎日新聞社、岩波書店の4者が共同して開催しております。岩波書店の事業ではありません。「岩波」は信用の代名詞としてみなさんが付けて下さいました。有

難いことです。昨年までの16年間で登壇して下さいました講師の方々は160名を超えます。日本を代表する言論文化人たちです。2001年には松本でも始めました。この文化運動がそれぞれの土地にしっかりと根づくことを希っています。

戦争は騙される者が いなければ起きない

Q 今の情勢とジャーナリズムについてどのような

にお考えですか。

A 私たちの目の前で起きていることは、知らないうちに気がついてみたら戦争をする国になっていたというようなものではありません。今は音をたててその方向に進んでいますね。安倍総理と政権の狂気は本気で

す。1997年、日本の右翼と右派勢力が統合して「日本会議」をつくり、連動して同じ年に「日本国會議員懇談会」「日本の前途と歴史教育を考える若手議員の会」が結成されました。どれも戦時の歴史事実を塗り替えることを共通の目的にしている集団です。安倍総理は1993年に当選して以来「若手議員の会」の事務局長として積極的に活動していました。現閣僚の多くはこの時のメンバーです。20年もかけて歴史改ざんと憲法破壊を企ててきた

集団が政権を乗っ取ったのですから、その「本気」と覚悟を軽視してはなりません。こうした事態にあつては、メディアとジャーナリズムの役割が重大なのですが、安倍総理に先を越されています。全国紙、放送局、通信社の社長、編集局長、政治部長などすべてのメディアの幹部が、安倍総理と会食と称する談合を重ねております。この実態を折にふれて明らかにしているのはしんぶん赤旗だけです。

当初から信濃毎日新聞の「考」を読める県民は幸せだと思っております。大事な時に中馬清福主筆を失ったのは残念ですが、後継者たちが頑張っております。今年1月に100歳になったむのたけじさんも現役のジャーナリストとして活躍しております。この二人に共通するのは現実に対して起きている事に対して、なぜそうなるのかを遡って原因を究明していることです。事実をゆるぎない真実にしていく作業がジャーナリストの仕事です。いまメディアに求められているのはこの思考と手法です。

映画監督伊丹十三さんの父親伊丹万作さんが敗戦の翌年、亡くなる直前に残した言葉がいま改めて語り継がれています。「戦争は騙す者だけでは起こせない。騙される者がいなければ起きない」という意味のことを云っています。メディアと私たちにとって重い言葉

です。私たちの向こう3軒両隣のまたその先きの先きに、騙されて安倍政権を支持している人々がいる訳ですから、私たちの声と気持ちがある人たちに伝われば、安倍政権を倒すことができます。

沖縄問題は挙げて 本土の私たちの問題

Q いまの沖縄についてどのように考えていますか。

A 昨年、沖縄では一連の選挙のすべてにおいて勝利しました。「辺野古に基地は造らせない」という1点結集の力が翁長さんを県知事にしました。その直後5日間でオール沖縄陣営が、候補者調整をして4選挙区すべてで勝利しました。第1区では赤嶺さんが当選しましたが、これまで自民党以外に投票したことのない人々が、政敵だった日本共産党の「赤嶺政賢」と書いたのですから、基地を造らせないという沖縄県民の思いの深さと強さは私たちの想像を超えています。「イデオロギーよりアイデンティティ」は翁長さんの言葉です。いま沖縄は保革が争いをしている場合ではない、沖縄の尊厳と存立自立のために全県民が一つにまとまろう、というメッセージだと思えます。翁長さんは、自分は安倍容認の立場だと云っていますが、沖縄には基地はいらないという県民の意志を貫いていけ

ば、軍事同盟としての日米安保から脱け出す方向に県民と共に進んでいくことでしよう。こまでくると沖縄問題は挙げて本土の私たちの意識と行動力の問題だと思っています。

革新懇は1980年代の政治状況の中で、新しい大きな共同戦線をつくるために結成されました。共同する政党ができないことを革新懇は民間組織としての地の利を生かして、自由闊達大胆に活動する責任を負っていると思います。そうすることが、若い人たちや革新懇を知らなかった人にもはつとするような魅力になるでしょう。

当面の目的目標が同じなら「悪魔」とも手を結ぶという度量と度胸を持つて下さればと思っております。相手を見損なつたとしても、それは国民、市民みんなの経験になり、新たなダイナミズムを生み出します。国際的にも反ファシズム統一戦線や国共合作の経験があります。沖縄の闘いから沢山のことを学びたいと思います。雑誌『世界』を読ん

でください。

【聞き手・山口光昭】



昨年の信州岩波講座でインタビューに応ずる雨宮処凛さん(NPO 法人ふおらむ集団999ブログより)